



センターの運営状況を語る山本茂之センター長

西区雄踏町宇布見の旧雄踏町役場を改修し、2010年1月にオープンした浜松市外国人学習支援センター。外国人のための日本語講座、外国人に日本語を教えるボランティア養成講座などの拠点として、開設からほぼ1年がたちました。「その間、うれしかったのは地元の方々の協力の輪が徐々に広がっていったことです。最近、地元の方を中心に作るサポーターズクラブが結成され、当センターの活動を盛り上げてくれています。また、当センターの玄関を花で飾ってくれる地域の花愛好家など、積極的に協力してくれる人が増えてきました。センターの円滑な運営には地元の理解が欠かせないだけに、非常に心強く思っています。」

「日常生活のための日本語や、中級・上級レベルの人向けの「わいわいクラス」、リトミックや絵本読み聞かせなどを体験しながら子どもと一緒に日本語を勉強する「親子クラス」があります。また多文化体験講座は、外国人市民の「雄



ポルトガル語会話の教材ビデオなどを用いた「セメンチ」の講座

「セメンチ」は、子どもたちのよりよい未来を創り上げようと2010年4月に結成。メンバーは外国人児童生徒就学サポーターなどの仕事をしながら、夜はセンターでポルトガル語を教えます。講座の受講者は公立学校の日本人教員など。ここで学んだポルトガル語をブラジル人児童・生徒らの支援に役立てようと、みんな真剣な表情です。このような場から、多文化共生への「将来の種」が育っていくといえるでしょう。

地元と情報交換し 市民協働で交流活動

同センターの事業の柱は、①外国人市民を対象とした日本語講座、②外国人市民の日本語学習を支援するボランティア養成講座、③外国人支援者のためのポルトガル語講座、④外国人市民・日本人市民が異文化に触れる多文化体験講座の4点。このうち外国人市民を対象とした日本語講座では、日本語レベルが初級から中級の人向けの「はじめての日本語」「日常生活のための日本語や、中級・上級レベルの人向けの「わいわいクラス」、リトミックや絵本読み聞かせなどを体験しながら子どもと一緒に日本語を勉強する「親子クラス」があります。

踏歌舞伎体験や、冠婚葬祭といった日本の生活習慣など多彩な内容。このほか、地元住民との情報交換や、市民協働による交流活動を行っています。「地域の皆さんの支援やボランティアの協力により、当センターではさまざまな講

座を実施しています。受講者数は、これまで延べ3000人に達し、受講者の国籍は日本、ブラジル、ペルー、フィリピンなどおよそ20カ国に上っています。また、センター2階には南米系外国人学校のムンド・デアレグリア学校も入居。今後、より多くの人にセンターのことを知ってもらいたいですね。」さて、センターで行われている講座はどのような内容なのでしょう。ある教室をのぞいてみると、そこで行われていたのは日本人向けのポルトガル語講座。先生は、日本の学校に子どもを通わせている日系ブラジル人の母親のグループ「セメンチ・パラ・オ・フトゥール」(ポルトガル語で「将来の種」のメンバー)です。「セメンチ」は、子どもたちのよりよい未来を創り上げようと2010年4月に結成。メンバーは外国人児童生徒就学サポーターなどの仕事をしながら、夜はセンターでポルトガル語を教えます。

将来の「種」を育てる人々



特集 多文化共生へ

The Times Are Changing; The Multi-cultural Society.

時代は変わる



日本人も外国人も、安心して暮らせる「多文化共生」のまちづくりを進めている浜松市。しかし、日本語能力が不十分な外国人や、「外国人とはコミュニケーションがとれなくて不安」と思っている日本人が多くいるなど、まだ解決すべき課題も多いのが現状です。そうした課題を克服し、日本人と外国人が互いに活かし合う社会へ。今、わたしたちは「チェンジ」するべき時を迎えています。

互いに触れ合い、溶け込もう

日本人も外国人も サンバでフューバー!

「わたしは、共生という言葉があまり好きではありません。何だか、違う者同士と一緒にいるような感じがするからね。日本人だって外国人だって、同じ人間。お互い自然に溶け込んでいけるよう、人間対人間の付き合いをするのが大事だと思います。だから、わたしは共生の代わりに「一緒にやらないか!」と言ってるんですよ」。そう言って豪快に笑うのは、遠州浜第三自治会(南区)の



外国人市民の相談に乗る土屋武司会長(正面右)

土屋武司会長です。

土屋さんは平成14年に同自治会の副会長に就任し、17年から会長を務めています。長年、地域をまとめてきた土屋さんによると、遠州浜地区に外国人が多く住むようになったのは今から15年ほど前のことだといいます。当時、市内の工場では人手不足が深刻になり、それに伴ってブラジルなどから大勢の外国人が働きに来て、遠州浜地区などに住むようになったのです。

外国人の急増で、まず問題になったのはゴミの分別でした。南米などではゴミ分別の習慣がなく、間違ったゴミの出し方をする事によって日本人住民との間でトラブルが発生したのです。この問題を解決するため、土屋さんは外国人と日本人の双方に「ルールを守ることを徹底して訴えました」。

「ゴミを分別しない外国人はけしからんと怒るのではなく、まず外国人に日本社会のルールを理解してもらうことが先決。だって、サッカーのルールしか知らない人に野球のルールを分かれと言っても無理でしょう?それに、日本人の中にもゴミを分別せずに出す人もいて、こっちはルールを分かった上でやってるんだから余計に始末が悪い。ルー

ルを知らない外国人には丁寧に説明し、ルールを守らなさい日本人には『ダメだよ!』と厳しく言うことで、トラブルはなくなりましたね」

また、土屋さんは地域の外国人と日本人の融和を図るため、昨年夏にユニークな行事を企画しました。それは、地区の夏祭りにブラジルのサンバを取り入れたこと。地元のダンス指導者のブラジル人から、子どもたちがサンバを教えてもらいました。当日は、子どもたちのサンバに大人の日本人、外国人も加わって、大きな踊りの輪が広がったそうです。

「大切なのは『外国人だから』という特別な意識を持たないこと。日本人に



外国人が参加して大いに盛り上がった昨年の夏祭り

先輩バイリンガルが 後輩の自立を支援

一方、こちらは中区海老塚二丁目の浜松市南部公民館。ここで開かれているのは、浜松に住むフィリピン人を中心としたグループ「フィリピン・ナガイサ(チ



医薬品の説明で笑顔のはじける「ナガイサ」の日本語教室

ガイサはタガログ語で仲間)による、フィリピン人のための日本語教室。まだ日本に来たばかりのフィリピン人に、在日年数の長いバイリンガルの先輩や日本人が日本語や日本の生活習慣を教えています。

この日のテーマは「薬局での医薬品の買い方」。薬の種類や説明書に漢字で書いてある用法、用量を理解するための勉強です。講師は、日本語、タガログ語、英語を使っている生徒たちにいるいろいろな質問を投げかけます。「食前、食後の意味は?分かった人は手を挙げて!」得意な「笑い」で、教室内には笑顔が絶えません。

この教室の受講者の中には、日本で生活する上での不



代表の中村グレイスさん(左)と、半場和美さん

安や悩みを抱えた人も多いため、日本語を教えるだけでなく、生活相談の要素も取り入れているのが特色です。

「ナガイサ」代表の中村グレイスさんは語ります。「わたしたちの活動のきっかけは、16年ほど前、日本人男性と結婚したフィリピン人女性が集まり、一緒に日本語や日本文化の勉強を始めたことでした。その後も来日するフィリピン人が増え、先輩のバイリンガル講師という立場で、その人たちをサポートするようになったんです。わたしたちの願いは、先輩たちが日本の社会で自立し、充実した生活を送ること。『大丈夫だよ!』と言いつつ、背中を押してあげたいと思っています」。

また、「ナガイサ」ではフィリピン人の小・中学生に対する「ジュニア・南部公民館」で学習支援も行っています。南部公民館の別の1室では、日本人ボランティアや日本で高校まで進学したフィリピン人生徒たちが子どもたちに寄り添い、ほぼマンツーマンでさまざまな教科を教えています。

こうした学習支援を行う背景について、「ナガイサ」の日本人メンバーである半場和美さんは次のように話します。

「4年ほど前から、日本在住のフィリピン人が母国から自分の子どもを呼び寄せるケースが増えました。特に最近、市内の小・中学校に転入してくるフィリピン人の児童・生徒の数は、ブラジル人に匹敵するほど多いと聞いています。週末は、わたしたちの日本語教室に親子で参加するケースも少なくありません。『バイリンガルスタッフがいる強みを生かし、家族単位でサポートしてほしい』という強いニーズがあるんです。大切なのは、当事者だけで不安や悩みを抱え込まないこと。そのためにも、地域の日本人の幅広い協力を得られるよう、ネットワークづくりを大切にしていきたいと考えています」

さらにグレイスさんが続けます。「わたしたちの仲間が孤立しないよう、一人でも多くの地域の人が目を向けてくださることを願っています」。

「ニュージェネレーション」への期待

就学サポーターが異なる文化を橋渡し

これからの新しい多文化共生社会を築いていく上で大切なこと。それは「若い世代」が羽ばたいていける環境を、いか



休み時間にブラジル人の子どもたちと談笑する中島イルマさん

に整えていくかではないでしょうか。外国にルーツを持ちながら、日本の社会で育った子どもたちには、一般の日本人にはない独特の感性があります。その感性は、現在の日本を覆う閉塞感に風穴を開け、世の中を元気にする大きな可能性を秘めているかもしれません。

そうした可能性を花開かせるために、まず必要なのは何と言っても教育です。その一例として、ブラジル人など多くの外国人児童が通う佐鳴台小学校(中区佐鳴台)の教室を訪ね、現場の様子をのぞいてみることにしましょう。

ここは算数の授業を行っている5年生のクラス。教員ではない女性が外国人児童と個別に向き合い、丁寧に教えています。この女性は日系ブラジル人の中島イルマ・雅恵さん。日本人男性と結婚し、2児の母であるイルマさんは、佐鳴台小などの小学校で外国人児童生徒就学サポーターとして活躍しています。

この日、イルマさんが受け持ったクラスでブラジル人児童は3人。いずれも、まだ日本の小学校に編入したばかりで日本語は上手ではありません。そんな子どもたちは、休み時間になるとブラジル人同士で集まり、ポルトガル語で話しています。その様子を日本人の児童が見て

「何を話しているか分からなくて不安」と思うこともありました。「あれはただ、母国語でしゃべりたいだけなんです。あるとき、夢中で話をしている

ブラジル人の子たちにそっと近づき、話の内容を聞いてみました。そしたら「悪いことをした人は神さまから罰を受ける。だから、いっぱいいいことをしようね!」なんて話してるんです(笑)。それを聞いて、この子たちを何とかしてあげなきゃいけないなと思いました。」

ブラジルの学校制度は日本と大きく異なり、教育レベルもバラバラ。日本へ来てても学校のルールが分からず、不登校になる子ども少なくありません。「そうした文化の違いを乗り越えられるよう、橋渡しするのがわたしたちの役目なんです」。最近では日本語が上達し、サポートを必要としない子も増えていますが、母国や外国人学校から転入してくる子もいます。イルマさんたちサポーターの存在は、これからも不可欠といえそうです。

「カラー」を分かち合い互いの理解を深める

さて、ここからは外国にルーツを持つつつ、幼いころから日本で生活し、成長した若者たちを紹介しましょう。今回、それぞれルーツの異なる3人の男女に集まってもらい、いろいろな話を聞きました。もちろん、彼らの日本語はパーフェクト。果たして、どんな発言が繰り広げられたのでしょうか。

まずはベトナムにルーツを持つ高橋ひよつまさん、28歳。1982年、ベトナム戦争で祖国を去ったインドシナ難民として、生後3カ月で日本へ来ました。「両親は日本社会で生きていくために数多くの痛みを経験した移民一世。わたしはそんな両親の苦勞を目の当たりにし、自

小・中学校、高校を卒業。名古屋市の大学に進学しましたが、2年生で休学し、現在は市内の工場で働いています。「工場を勤務先に選んだのは、工場働く外国人がどんな状況か知りたかったから。工場勤めの外国人に『アマダにはわたしたちの気持ちは分からないよ』と言われ、じゃあ働いてみよう!」と思っ

たんです」。

アマダさんは、両親とはポルトガル語で会話しますが、日本語の方が少し得意。また妹はポルトガル語が得意ではなく、姉妹の間では日本語で会話するそうです。「わたしたちのような外国生まれの子どもは、日本と母国の言葉や文化が中途半端に身に付く『ダブルリミテッド』と

いう状態になりがち。そうならないための学習は本当に難しいんです」。

大学で英語

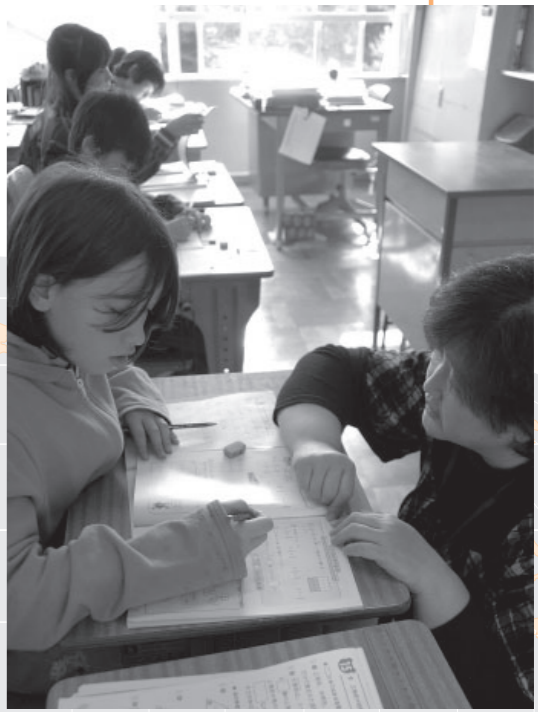
学を専攻するアマダさんは今年4月には復学し、今年から必須化する小学校英語を見据え教員資格を取得したいと考えており、「小学校で英語を教えながら、外国人の子どもたちをサポートしたい」と話しています。そして、最後は20歳になった

「現在、わたしは市内の縫製工場の管理者。従業員はすべて中国人女性で、彼女たちがいかに気持ちよく働いてもらえるかを心掛けています。将来の夢は縫製とデザインを結び付けた新ビジネスに挑戦すること。また、先日、高校生に向けて話をしましたが、自分の体験からいろいろ考えたことを多くの人に伝える活動にも、積極的に取り組んでいきたいと思っています」

続いては重井アマダさん、22歳。7歳でブラジルから日本へ来て、湖西市の



小さいころの写真を手にする、左から重井アマダさん、高橋ひよつまさん、阿部恵美子さん



児童と向き合い、じっくり指導します

ばかりの阿部恵美子さん。日本人の父とフィリピン人の母の間に生まれた浜松っ子です。いつも明るい笑顔顔を絶やさない恵美子さんですが、過去にはつらい経験もありました。6歳の時に母が家を出て行き、恵美子さんは父と暮らすようになります。しかし、やがて父との折り合いが悪くなり、14歳の時、恵美子さんはとうとう家を飛び出してしまいました。

「しばらくアパート暮らしをした後、ある教会のアメリカ人牧師と出会い、その家族の一員になったんです。そこから高校まで進学させてもらい、今も一緒に暮らしています」。温かな家庭を得た恵美子さんは、一時、関係の悪化していた両親と和解。それをきっかけに、フィリピン、日本、アメリカという三つの文化にはぐくまれた結果、今の自分があることに気付いたといいます。「わたしという人間の中にはいろいろな言語や文化という、カラーがあり、それを多くの人と分かち合えば互いの理解はもっと深まるはず。現在、わたしは仕事をしていますが、昨年、わたしはボランティア活動なども行いました。今後もそうした活動を通じて、さまざまな「カラー」を持つ人たちと交流していきたいですね」。このような多文化要素を持つ若者たちの活躍で、浜松はもっと元気で住みやすいまちに変わっていくと期待できそうです。

すべての住民の参加と協働による多文化共生へ

いかなければなりません。これから展開すべきさまざまな施策の中で、土台となるのは何といても教育です。浜松市では、定住資格を持つ外国人の子どもたちの「不就学ゼロ」全員就学」つまり義務教育と同じ状態になることを目指しています。まずは、外国人の親に子どもを就学させなければならぬと思ってもらうことが重要です。しかし、当事者の意識以外にも課題があります。それは、現在の外国人登録制度では浜松に外国人の子どもの何人いるか、その就学状況はどうかなど居住実態を正確に把握できないことや、日本人と外国人で構成する複数国籍世帯が、住民基本台帳法と外国人登録法という二つの制度に分かれて登録されていることです。これらがサポート体制の構築の妨げになっています。

この問題については、住民基本台帳に外国人も記載されるよう平成21年度に住民基本台帳法が改正され、24年度に施行される予定です。しかし、われわれとしては国の制度改正をただ待っているわけにはいきません。今、不就学の子を放置すれば、その子どもは数年後、一度も教育を受けられないまま大人になってしまふんです。このため浜松市では、来年度から不就学ゼロに向けた取り組みに本腰を入れていく方針です。



企画部
神門純一 部長
こうと

浜松市は、およそ80カ国の外国人が住む全国有数の「外国人集住都市」。これまで、他都市に先んずる多文化共生行政を推進してきた実績をベースに、今後、どのような施策が必要でしょうか。企画部の神門純一部長にポイントを聞きました。

「多文化共生」のここが訊きたい

Q 浜松の多文化共生の先進度は？

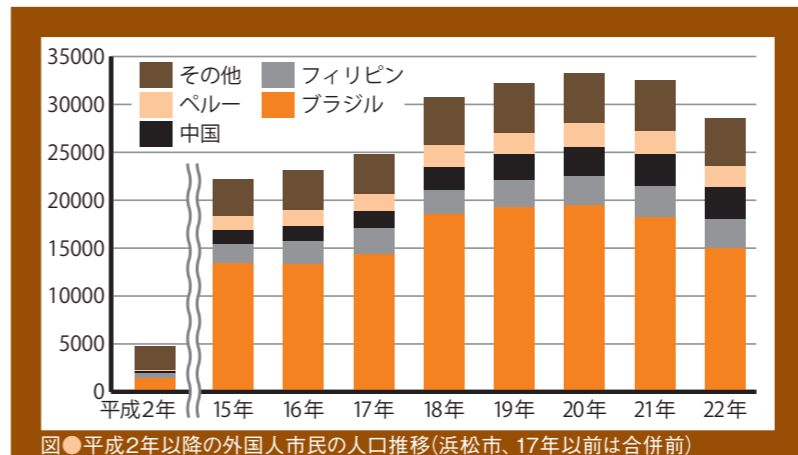
A わたしは昨年8月に当市の企画部長に就任するまで総務省に勤務していましたが、

そのころに印象的だったことがありません。それは平成20年9月に起きたリーマンショックのすぐ後のこと。当時、わたしは財政課で特別交付税の地方への配分を担当し、リーマンショックで悪化した地方財政をどうやって支援するかを必死に考えていました。その大きな柱は、外国人の雇用問題を含む多文化共生への支援。まず地方の声を聞いて制度構築の参考にしよう、わたしが真っ先に問い合わせたのは、多文化共生の先進都市としてすでに知られていた浜松市でした。

わたしは浜松市の担当課職員に電話で「どんな支援が必要ですか」と聞きました。すると、こんな答えが返ってきました。「支援していただけるのは大変ありがたいこと。ただ、当市はすでに独自の対策を考え、実行に移そうとしています」。この返答にわたしは驚きました。浜松市の「国に頼りたくない」という心意気は大したものだと思います。多文化共生の先進度も極めて高いと実感しましたね。

Q 外国人市民の人口推移は？

A 平成2年の「出入国管理及び難民認定法(入管法)」改正以降、外国人定住者の数は急速に増えましたが、最近是不況の影響で減少傾向にあります。しかし諸外国の例を見ると、一度定住した外国人は最後まで移住先に残ることが多く、わが国も例外ではないと思います。今後の施策は、このことを前提に考えて



Q 不就学ゼロへの対策の中心は？

A まずは地域の外国人コミュニティや、外国人を支援している団体などに働きかけ、外国人の親に不就学の要因などについて直接聞き取りをしていきたいと思えます。また、外国人を多く雇用している企業の協力も必要になってくるでしょう。外国人市民は、日本人と同様、地域社会を支える大切な人たち。そんな人たちが社会で生きていくための教育を受けられるよう、地域全体で支えていくことが重要です。これには当然、ある程度のお金がかかりますが、

Q 大切なのは市民の意識改革では？

A その通りだと思います。これも教育にかかわることですが、しっかりとした教育を受けた外国人の子どもたちが成長し、優れた人材として社会に貢献していけば、外国人を見る日本人の目も大きく変わってくるはず。今年生まれた子が成人する20年後の社会では、外国人が多方面で活躍するのが当たり前になっているかもしれません。



外国人学習支援センターで開かれたもちつき大会

その意味で現在は過渡期といえますが、アクションは今すぐにでも開始する必要があります。日本人の外国人への意識が変わることで外国人が自信を持ち、それによって優れた能力を持つ外国人がより多く登場し、お互いに協力し、切磋琢磨することで、さらによい方向へと変わっていく。そんな好循環が生まれるよう、行政として最大限の努力をしていきたいと思っています。